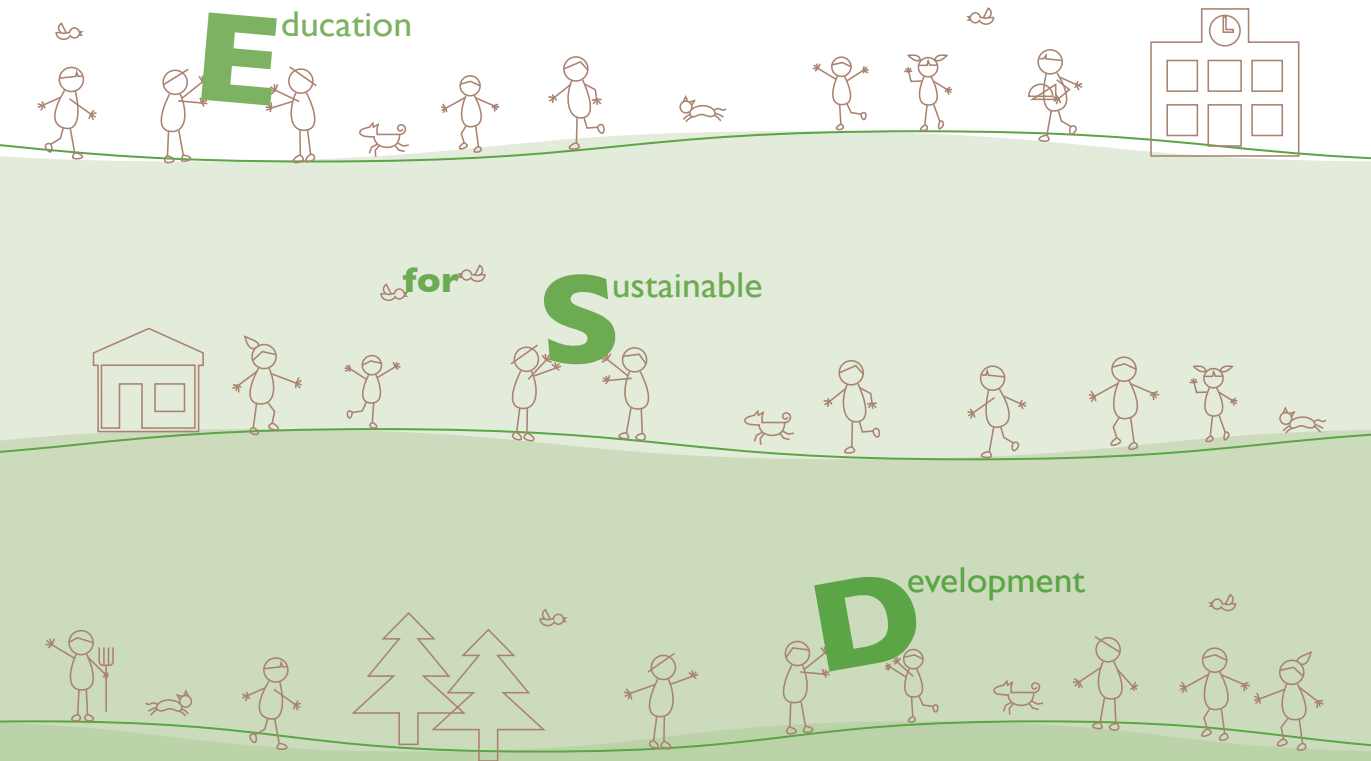


未来をつくる学びをはじめよう

地域から学ぶ・つなぐ

39のヒント



環境省

国連持続可能な開発のための教育の10年促進事業

Think Globally Act Locally

「地球規模で考えて、地域で行動しよう」

環境問題や世界の貧困、食糧問題、異文化対立の問題など、世界が今直面している様々な問題は、私達の暮らしと密接につながっています。

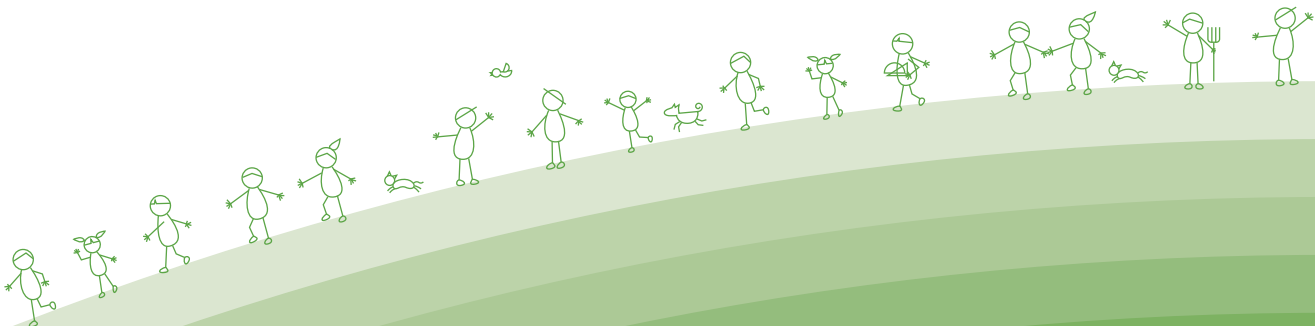
これらの問題を解決し、持続可能な社会をつくるためには今の社会を構成するあらゆる人々が様々な問題のつながりに気づき、「持続可能性」という視点を持って暮らし方や仕事、社会のあり方を足元から変えていくことが重要です。

そのための学びの場、人づくりの場、それを国際社会ではESD（持続可能な開発のための教育*）と呼んでいます。

この冊子は、主に地域の教育や学習、そして市民活動の担い手の方々に向け
ESD とはどんな教育や学習なのか？
どうやってESDの視点や方法を取り入れていけばいいのか？
どうやってESDを進めるためのネットワークをつくっていけばいいのか？
といった「地域でESDを実践する時のヒント」をお伝えするために作成しました。

すべてのヒントは、**環境省ESD促進事業***で持続可能な地域づくりに向けたESDの実践に取り組んだ**14の地域***の実践者による生の声です。
ぜひご活用ください。

※ESD：持続可能な開発のための教育（Education for Sustainable Development）の略。
持続可能な社会の実現を目指し、私達一人ひとりが社会の課題と身近な暮らしを結びつけ、よりよい社会づくりに参画する力を育むことを目指す教育や学習活動のこと。現在「国連持続可能な開発のための教育の10年」（2005年～2014年）というキャンペーンのもと、世界の国々がESDの推進に取り組んでいます。



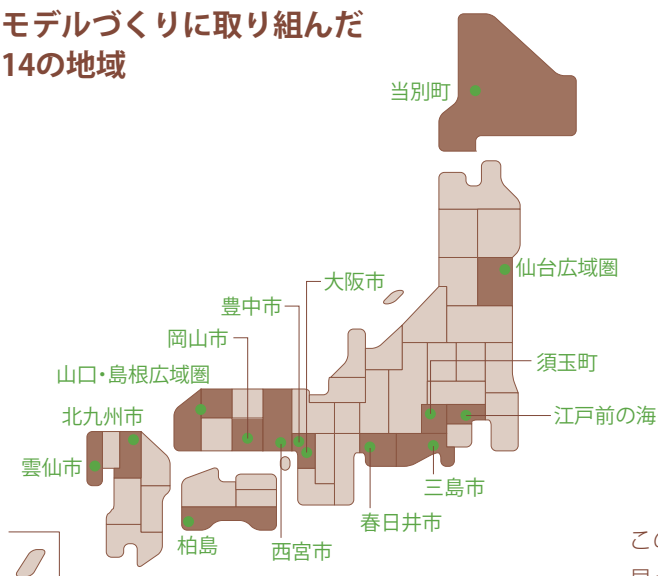
＊環境省ESD促進事業

「ESDの概念はわかったけれど、具体的にはどんな活動をすればいいのでしょうか？」

そんな疑問に応えるために、環境省は平成18年度から3年間、地域におけるESDのモデルをつくるため、持続可能な地域づくりに向けてESDの実践に取り組む14地域を公募により採択し、支援を行いました。

それぞれの地域では、NPO、行政、企業、学校、市民等多様な主体の参画による「ESD推進協議会」を立ち上げ、持続可能な地域づくりに向けた教育の「内容」を検討し、実施しました。

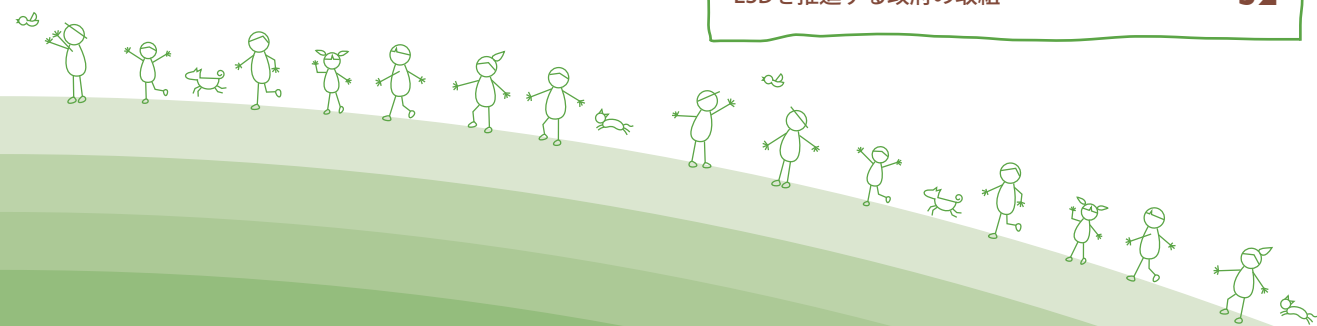
＊モデルづくりに取り組んだ 14の地域



この冊子は、「14地域の実践」と、その実践から見てきたESDの形やつながり、ESDをつくる時の「39のヒント」を紹介しています。ヒントから、実践事例から、どちらからでもお読みください。

● contents ●

「未来をつくる学び」～ ESDとはなにか～	02
「未来をつくる学び」をはじめる39のヒント	06
「未来をつくる学び」14の実践紹介	17
14地域からのメッセージ	32
ESDを推進する政府の取組	32



「未来をつくる学び」～ESDとはなにか～

未来をつくるのは私達

「どんなまちに暮らしたいですか」と問われたら、
あなたはどうか答えるでしょうか？

「第一次産業や地場産業が元気で、若者が働き続けられるまち」

「身近な自然の中で、子ども達がのびのびと遊べるまち」

「社会と接点を持ちながら、楽しく子育てができるまち」

「外国人もハンディを持った人も、安心して、普通に暮らせるまち」

「未来の子ども達に豊かな環境を残してあげられるまち」……

これらは、ESD促進事業に参加した14地域が目指すまちのビジョンの一部です。

同じ地域に暮らす人々が何人か集まって、それぞれの思いを語りあうところから
まちの未来は描かれます。

そして、その未来を実現するために、思いを持った人達が動き始めていく。

でも、数人の活動では大きな変化を生み出すことはなかなか難しいもの。

個人之力だけではなく、組織の力や組織とのつながりも必要になってきます。

14地域では、行政、企業、学校、そして多様な市民が集まって

すべきこと、できることを考え、それらを組みあわせながら、

より多くの人を巻き込み、新しい動きを生み出そうと挑戦しています。





つながりに気づき、つながりを築く

「より多くの人を巻き込み、よりよい社会の仕組みをつくっていく」
言うのは簡単ですが、実行するのはなかなか難しいものです。
まず困るのは、簡単にできる「答え」が用意されていないこと。
答えは自分達で考え、試し、見つけていくことから始めなくてはなりません。
では、いったい誰と、どうやって、始めればよいのでしょうか？

この時の大切なキーワードが「つながり」です。

現在私達が直面している多くの課題は
「つながり」が希薄になってしまったことで生まれています。

例えば、東京湾では、大規模な沿岸開発が行われ、
いのち豊かな漁場の多くが失われました。
漁師は激減し、海苔の養殖などもできなくなり
潮干狩りも身近なものではなくなりました。
そして、海への関心はどんどん希薄になり、
生活廃水による富栄養化の問題や
湾岸の高層建築によるヒートアイランド現象は
悪化の一途をたどっています。

持続可能な「江戸前の海」を取り戻すために、東京海洋大学では
人と海の「つながりを学ぶ場」をつくることから始めました。
海の生命のほとんどは沿岸で育まれていること、
そして人間はその生命をいただいて暮らしてきたこと、
今でも東京湾は多くの生命を育み、漁業が行われていること、
それらを学ぶ場をつくるために、
博物館や漁業者、小学校、そしてNPOに協力を呼びかけました。
今は、みんなでいっしょに考えるワークショップ「寺子屋」を中心に、
東京湾について学ぶ「カフェ」と湾岸地域を訪れて漁労体験や歴史を聞く活動を
大学の授業と連動しながら行っています。

切れてしまった「つながり」を結び直す、
そのために、新たな「つながり」を育む、
これが「未来をつくる」時に大切な、元気の源になるのです。

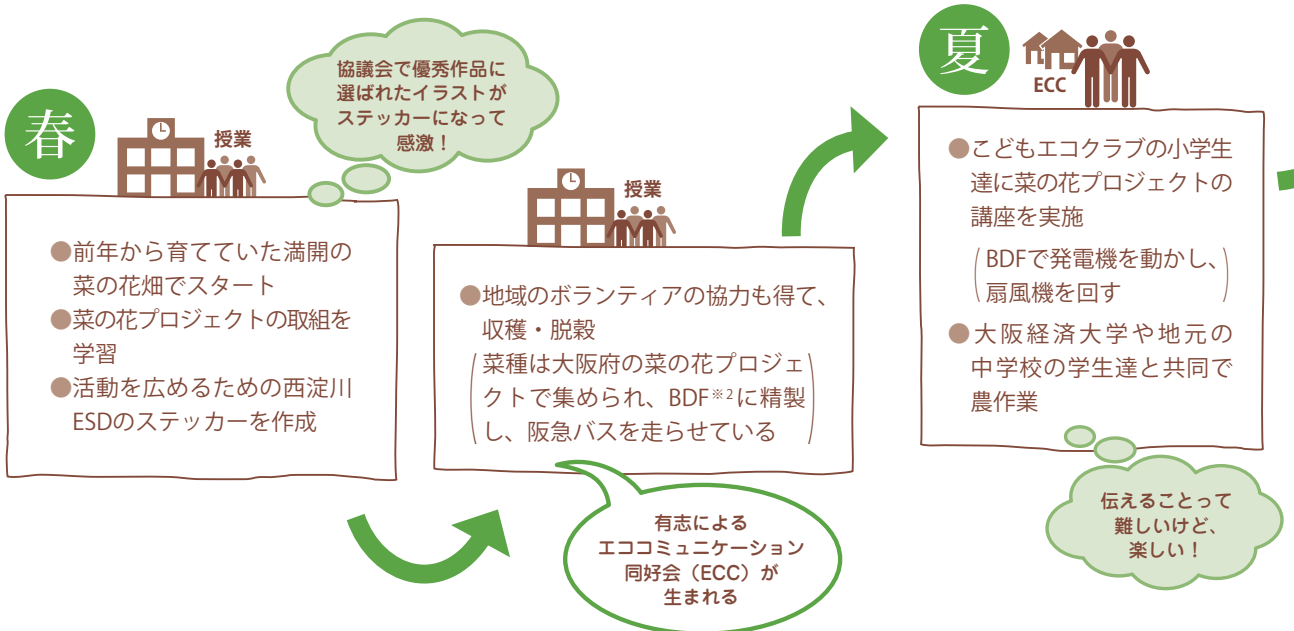
「活動」を生み出す「学び」

ところで、持続可能な社会をつくるための「活動」と、持続可能な社会をつくるための「学び (ESD)」は同じなのでしょうか？ 異なるのでしょうか？ ここで線を引くのは、なかなか難しいことです。

例えば、大阪の「西淀川ESD協議会」では、高校、大学、ガールスカウトなど、協議会の様々なメンバーが「菜の花プロジェクト」を取り入れながら、交通まちづくりについて考える事業に取り組んでいます。協議会メンバーである大阪府立西淀川高校では、必修科目「環境」の授業で「菜の花プロジェクト」^{※1}に挑戦。そこから生まれたエココミュニケーション同好会 (ECC) は、他の協議会メンバーとつながりながら、地域に活動の場を広げ、そこで大きく成長しています。

西淀川高校のESD

〈生徒達の変化〉

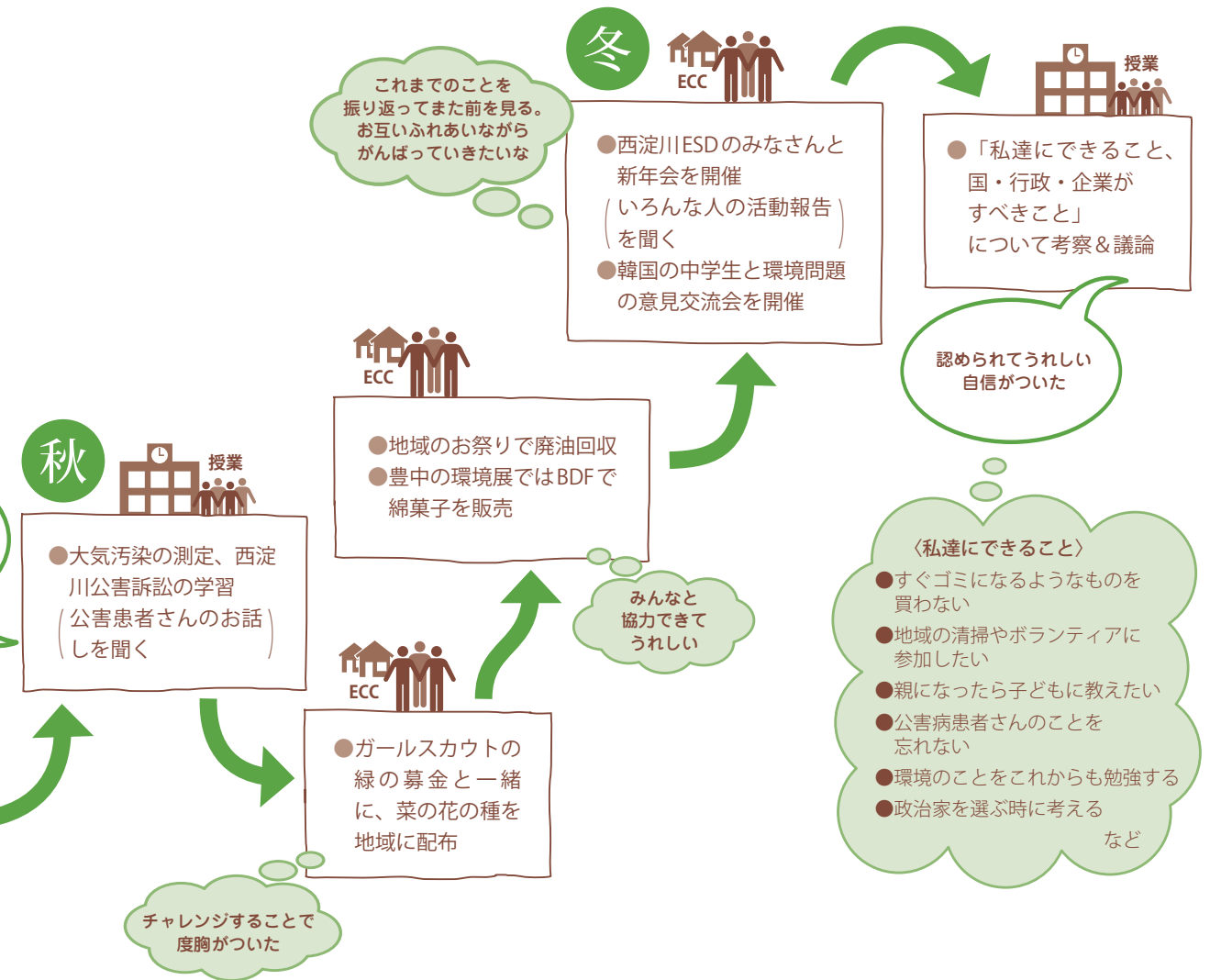


※1 菜の花プロジェクトとは

菜の花を育て、その油で料理をし、その廃油でクルマを走らせ、出たCO₂を菜の花が吸収という、循環型のプロジェクト。全国に広まっている。

※2 BDF (Bio Diesel Fuel) とは

バイオディーゼル燃料：動植物性油脂由来の代替燃料で、ディーゼルエンジンを有する車両、船舶、農耕機具、発電機等に使用されている。環境問題の解決策として世界中で注目を浴びている。



このように、ESDは「活動」を生み出す「学び」であり、また、「活動」を通して生まれる「学び」でもあります。

ESDは単に知識を獲得する場ではありません。

- 実際に体験して感じる・考える・そしてそれらを共有する
 - 多様な立場の人の意見や考え方を学びあう
 - 異なる価値観や意見を認め合いながら、合意や活動を生み出していく
- といった、参加体験型・問題解決型の手法が取り入れられていることで「活動を生み出す学び」が実現できているのです。

「未来をつくる学び」をはじめめる39のヒント

ESD 促進事業では、14地域が「未来をつくる学び」をつくり出し、それを発展させる事業に取り組みました。各地域に求められたのは、「地域の幅広い関係者が参加するESD推進協議会をつくること」、その協議会で話しあい、「持続可能な地域づくりにつながる学びの場をつくること」、そして「その学びの場が、継続的に発展していくような仕組みをつくること」の3点です。



学びのプログラムをデザインする

参加者がその気になる工夫、自然と人と社会のつながりに気づく工夫、多角的な視点が養われる工夫など、ESDをデザインする時のヒントを紹介します。

01. 「興味・関心」のあることを入口に
02. ほんもの体験・まるごと体験
03. 地域にある人・コト・ものを掘り起こす
04. いろんな立場の人と学びあう
05. 異なる年齢のグループと一緒に活動する
06. 「わたし達の未来」を描く
07. 「楽しい」が元氣と継続のキーワード
08. 学びと活動を積み重ねる



学びあう関係づくり

ESDに関わっているのはどんな人達？どんな役割を担っているの？決まった形はありませんが、地域に広がるESDのつながりの例を紹介します。

09. まちのパン屋さんや農家が先生に
10. 社会教育施設が大学生の活躍の場に
11. 地域ボランティアがまちづくり講座の講師に
12. ITや映画づくりでESDをサポートする
13. 大学生がアシスタント・ティーチャーに
14. 地域のリソースと学校の先生の出会いの場をつくる
15. コミュニティ活動のコーディネーターを育てる
16. 都市と農村をつなぐコーディネーターを育てる



新たな仲間を増やす

学校、自治会、行政、企業、NPO、教育施設、そして地域に暮らす人々……、地域の中のいろんな人とつながりをつくっていくヒントを紹介します。

17. ESDを旗印にする
18. ふりかえればESD
19. 直接会って話す
20. 地域の悩みを一緒に解決する
21. 学校には「力になれますよ」というスタンスで



このようにして生まれたESDの実践は、テーマの取り上げ方やプログラムの形、参加対象や実施体制など、ひとつとして同じものではありません。体制の作り方も様々です。

この章では、14地域の実践者の皆さんが、ESD促進事業に取り組むプロセスの中で見出した、ESDを始める時やESDを広げる時に参考になる“39のヒント”をご紹介します。

*14地域の実践は、17ページ以降に掲載しています。

また、さらに詳しい活動内容は、環境省のウェブサイトからご覧いただけます。

<http://www.env.go.jp/policy/edu/esd/index.html>



相乗効果を生み出す

一緒に活動することで、お互いにやりたかったことが形になる。予想以上の成果が生まれる。そんな可能性を拓くパートナーシップのヒントを紹介します。

22. 小さな種をみんなで育てていく
23. 能力と資源を活かしあう
24. みんながメリットを感じる企画
25. 学校の先生と一緒につくる
26. 「ふりかえり」を大切に



知恵と力を共有する仕組みをつくる

生まれたつながりを継続し、育てていくための仕組み、個人の能力や努力に頼り過ぎない仕組みづくりのヒントを紹介します。

27. いくつかの情報共有の方法を使い分ける
28. 無理をさせない・無理をしない
29. 自発性と連携を生み出しやすい体制を
30. 専任のコーディネーターを置く
31. 人や活動をつなぐリソースセンター
32. 地域のサポーターを組織化する
33. 学びあいの場をつくる
34. インターネットを活用する



体制を維持するための基盤をつくる

資金の調達と人材の確保は、全国共通の悩み。公的機関の協力、助成金、補助金、寄付、収益活動、人的貢献・・・、ESDの基盤づくりのヒントを紹介します。

35. 行政の施策に組み込む
36. 大学や企業の「地域貢献・社会貢献」とつなげる
37. 協定を結ぶ
38. 補助金、助成金を活用する
39. 収益活動に発展させる



学びのプログラムをデザインする 8つのヒント

01 「興味・関心」のあることを入口に 豊中

豊中では、子育て中の保護者を対象に、「おやつ」や「おもちゃ」など、子どもに関わる身近なテーマの講座やワークショップを行っています。「エコ」をストレートにぶつけるよりも、みんなの関心事から話題や思考をつなげていくことで、自分ごととして課題をとらえ、積極的な参加を得ることができると考えたからです。

02 ほんもの体験・まるごと体験 当別

当別では、パンづくりのまるごと体験に取り組みました。1年を通して小麦や塩やバター、酵母菌までも全部自然から採取・栽培し、パンを焼き、販売する。子ども達が食べ物をいただく時に、つくる人やつくる過程に思いをはせられるようになったらいいなど願って。

03 地域にある人・コト・ものを掘り起こす 三島

地域に昔から伝わるお料理、遊び、祭り、地場産業などは、地域の自然と暮らしのつながりを見つめ直す魅力的な教材です。みしまESD環境まちづくりゼミでは、まちづくり・歴史・文学・農業や源兵衛川での「ちゃんかけ拾い」などを通して、水にまつわる文化や環境保全活動の取組への理解を深め、若者の持続可能な地域づくりの活動に主体的に参加する意識を育んでいます。

04 いろんな立場の人と学びあう 柏島

柏島では、夏期講習の最終日、島に暮らす漁業者やお年寄りを前に、大学生が学んだこと・考えたことを発表する場を設けました。学生の提案は、時間的な制約があり掘り下げが足りないものもあるものの島の人への刺激となり、学生にとっては島の厳しい現実を改めて知る機会となりました。



ESDは、単に知識を獲得するだけの場ではありません。「活動を生み出す学び」は、「自分も何か始めてみよう」という意欲や、一緒に始めようとする仲間＝「人と人とのつながり」も同時に生み出すことが大切です。その気になる工夫、自然と人と社会のつながりに気づく工夫、多角的な視点が養われる工夫など、ESDをデザインする時のヒントをご紹介します。

05 異なる年齢のグループが一緒に活動する 西淀川

西淀川では、高校生、大学生、ガールスカウトなど様々な世代が菜の花プロジェクトに取り組みました。大学生が高校の授業を手伝ったり、高校生が小学生と一緒に募金活動を行ったり、異世代の交流がよい刺激となり、それぞれの成長の場となっています。

06 「わたし達の未来」を描く 雲仙

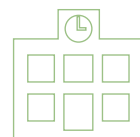
雲仙では、バックキャストという手法を使って、50年後に「こうありたい」と思うまちの姿を想像してみました。現状の延長線からではなく、飛躍した発想をすることで多様なステイクホルダー間でも未来像を共有することができ、活動の方向性が見えてきます。すてきな未来像は仲間を広げる時にも役立ちます。

07 「楽しい」が元気と継続のキーワード 須玉

都会から須玉に人々が通ってくるのは、そこにワクワクしながら関われる活動があるから。やってる人が楽しんでいるから、人が人を呼ぶできます。「おいしい」「うれしい」「もうかる」などのキーワードも意識しています。

08 学びと活動を積み重ねる 岡山

京山地区の子ども達は、体験を通じて疑問や関心の種を見つけたら、それらをどんどん探求します。マイバッグはいい活動なのに広がらないのはなぜか？実用的かつ機能的で持ってまわりたくなるかっこいいマイバッグのコンテストを開こう！探求と実践の積み重ねが、未来をつくる力と仲間を育てています。





学びあう関係づくりの8つのヒント

09 まちのパン屋さんや農家が先生に 当別

当別のパンづくりまるごと体験では、有機農業に取り組む農家の方や、北海道で最初に天然酵母のパンづくりに取り組んだ地域でも人気のパン屋さんのご主人が、子ども達の活動の先生を買って出てくださいました。プロに学んだ子ども達がワクワクするのはもちろんのこと、農家の方もパン屋さんも子ども達との経験を大いに楽しみ、新たな意欲に火がついたようです。

10 社会教育施設が大学生の活躍の場に 江戸前

江戸前リーダー養成では、東京海洋大学の学生達が大田区立郷土博物館の学芸員や環境教育のNPOのサポートを得て、2008年オープンの「大森ふるさと浜辺公園」や2009年オープンの「大森海苔のふるさと館」で行うESDプログラム企画に取り組みました。

11 地域ボランティアがまちづくり講座の講師に 三島

三島ESD環境まちづくりゼミでは、これまで地域で環境まちづくりに取り組んできたボランティアの大人達が、大学生とまちづくりを語りあいました。自分達の活動の歴史や成果を学生達と話しあうことは、活動の意義を見つめ直すよい機会となっています。

12 ITや映画づくりでESDをサポートする 岡山

岡山市京山地区のESD協議会のメンバーには、公民館活動でパソコン技術を教える講座を行っているITサポーターや映画づくりに取り組むグループがいて、子ども達と一緒に、環境点検活動の図表データや活動記録づくりの支援や、地域の記憶やキーパーソンを掘り起こし映画化する活動などに取り組んでいます。



ESDでは、様々な立場の人が関わって、学びの場をつくっていきます。そこには進行役や講師役、コーディネーターなど様々な役割があり、それぞれが得意な能力を生かしながらその一端を担っています。どんな立場の人が、どんな役割を担うことができるのか、新たな役割を担うためにどんな人材育成の場がつけられているのか、ESDの担い手が広がっていくヒントをご紹介します。

13 大学生がアシスタント・ティーチャーに 春日井

中部大学では、春日井市の小学校でのESDを組み立て、サポートする活動に、学生達が積極的に取り組みました。自らが講師になったり、子ども達のグループディスカッションを進めたり、森での歩き方や調査方法、障がい者の方への接し方を教える側になるために、事前にそれらを専門家から学んで、のべ19人の学生が小学校の授業で活躍しました。年齢の近いお兄さん・お姉さん達は、子ども達の人気者です。

14 地域のリソースと学校の先生の出会いの場をつくる 当別

当別では、ESD協議会主催の教員研修で、行政職員や農家の方、企業の社長さんとの出会いの場をつくりました。教員とは異なる立場から社会づくりに関わる人々のお話は新鮮で、子ども達に「新しい世界を体験させたい」という意欲が生まれました。

15 コミュニティ活動のコーディネーターを育てる 西宮

西宮市では、「エコ・コミュニティ会議」という地域の自治組織づくりに取り組んでいます。ESD協議会では、多様な市民が集まり、地域の歴史や現状を踏まえ、よりよい地域社会を前向きに考えつくっていく場をコーディネートする、地域の担い手育成に取り組みました。

16 都市と農村をつなぐコーディネーターを育てる 須玉

須玉町は、都市農村交流による持続可能な地域づくりの先進地。耕作放棄地や古民家など農山村にあるリソースを活用し、農業や林業、田舎暮らしの体験などを提供して、都会の人々を惹きつけています。ESD事業では、そんな活動を企画・運営するコーディネーター養成に取り組みました。





新たな仲間を増やす **5**つのヒント

企業の協力を得たい、学校と一緒に活動を展開したい、自治会の力を借りたい…、でも一緒に活動する仲間を増やしていくのは、そう簡単なことではありません。真摯で地道なアプローチが基本ですが、相手の心を開くもうひと工夫をご紹介します。ESDという言葉の使い方も地域の状況によって工夫していければよいですね。

17 ESDを旗印にする …………… 岡山

岡山では、ESDを旗印として活動を広げています。ESDを意識化、見える化して、国連のもとで世界とともに持続可能な社会づくりのための教育活動に取り組んでいくぞ、という意識が、子ども達や地域住民のワクワク感を刺激しています。

18 ふりかえればESD …………… 西宮

西宮では、以前から持続可能な社会づくりに向けて様々な主体や世代、地域、課題をつなぐことを基本に、学びあうまちの仕組みづくりを進めてきており、ESDという言葉は後付けになっています。そんなアプローチ方法を「ふりかえればESD」と呼ぶ人もいます。

19 直接会って話す …………… 西淀川

西淀川では、学校や行政との接点を増やしたいという思いから、活動の説明をかねて行政の担当部署や社会教育施設などにヒアリング調査に伺いました。直接足を運ぶことで、活動の魅力や熱意をしっかりと伝えることができ、相手の様子や関心のあるポイントもわかり、接点がつくりやすくなりました。

20 地域の悩みを一緒に解決する …………… 山口

山口では、人手不足の農園や山林の作業をプログラム化し、参加者に作業に関わってもらうことで、地域の抱える悩みの解決を手伝っています。地域が抱える多様な課題に取り組むことで、ミッションを共有することができ、徐々にネットワークが広がっています。

21 学校には「力になれますよ」というスタンスで …………… 柏島

学校には、「新しいこと始めましょう」というのではなく、「今やっていること、やろうとしていることの力になれますよ」というアプローチを心がけています。どんな力になれるのか、具体的な提案をすることがカギです。



相乗効果を生み出す 5つのヒント

一緒に活動することで、お互いにやりたかったことが形になる。予想以上の成果が生まれる。そんな可能性があるからこそ、苦勞してでも一緒にやってみる価値があるのでしょう。苦勞の中から見えてきた、パートナーシップのツボのご紹介です。

22 小さな種をみんなで育てていく 春日井

春日井では、関わるすべての人がそれぞれの得意分野でイニシアティブをとり、「だれもがリーダー」というスタイルで実践しています。いろんな人が関わりあって育てていくのがESD。一人ひとりの思い、得意技をパズルのように組み合わせると、やる気も楽しさも倍増します。

23 能力と資源を活かしあう 北九州

北九州では、新たな協働を生み出す最初のステップとして、参加組織がやっていること、得意なこと、不得意なことを共有しました。保育園という場で環境学習をしたいと思っている保育士と、布絵本を通じて地域の文化や自然に関心を持ってもらいたいというNPOとの出会いも、この協議会で生まれました。

24 みんながメリットを感じる企画 柏島

学生に実践的な学びの場を提供したい大学、島を環境教育のフィールドとして活用してもらいたいNPO、そして、若い人達との交流を求める地域、それぞれのニーズを満たし合うことで、高知大学の共通講座「土佐の海の環境学（通称：柏島学）」が実現しました。

25 学校の先生と一緒につくる 春日井

春日井では、小学校向けのESD教育モデル（KIZUNA ラーニング）を学校の先生と一緒につくっています。学校の年間カリキュラムやスケジュール、教科内容や総合学習の時間の使い方など、先生と相談しながら進めるためにも、年度末までに次年度の予定等をヒアリングし、4月末頃に一緒に作り始めるのがポイントです。

26 「ふりかえり」を大切に 江戸前

江戸前ESDリーダー養成では、事業や授業が終わったら、関係者で感じたこと、発見したことを分かちあうように心がけました。それにより、活動の意味が再認識され、継続への力になります。また、次回への改善にもつながりました。



知恵と力を共有する仕組みをつくる **8**つのヒント

27 いくつかの情報共有の方法を使い分ける …………… 西淀川

西淀川では月に1回、協議会と事務局会議を交互に開催していましたが、協議会への参加者がだんだん減ってきました。そこで、欠席した自治会や行政の担当者には、事務局から活動報告や個別の協力を仰ぐ形でつながりを維持。メーリングリストやブログもよい情報共有のツールになっています。

28 無理をさせない・無理をしない …………… 豊中

多様な人が集まれば、それぞれの事情が異なるのは当たり前。ESDとよなかはゆるやかなネットワークなので、できることを分担しあうことを基本としつつ、「今回はごめん!」「いいよ、次回はよろしく!」と気軽に言い合える関係を大切にしています。

29 自発性と連携を生み出しやすい体制を …………… 北九州

一緒に活動をつくり、実施していくには、大きすぎる協議会では動きにくいこともあります。北九州では、プロジェクトごとに小さなグループをつくる、組織の長ではなく動きやすい若手のワーキングチームをつくるなど体制を工夫しました。

30 専任のコーディネーターを置く …………… 西淀川

西淀川では、ESD促進事業の予算でインターンの大学院生を専任スタッフとして雇用しました。彼が関係主体の活動にいつも参加することで、各主体や子ども達との信頼関係を構築し、各主体の橋渡し役を果たしたため、プロジェクトの実行力が高まりました。





生まれたつながりを継続し、育てていくために、そしてそれぞれが持っている知恵と力を共有し、よりよいパートナーシップに生かしていくためには、つながりを「仕組み」にしていくことが大切です。また、その仕組みの中でよりよい関係性をつくっていくためには、ちょっとした心遣いも欠かせません。個人の能力や努力に頼り過ぎない仕組みづくりや関係づくりの工夫、あなたの地域にあった方法を見つけてください。

31 人や活動をつなぐリソースセンター 豊中

ESD（のような活動）を始めたいと思った人が、気軽に相談できる場やネットワークがあると便利はらず、そんな思いからESDとよなかではリソースセンターづくりに取り組みました。関係者の地縁・知縁を生かして、地域のリソース（活動グループや得意技を持つ個人など）の共有からスタートです。

32 地域のサポーターを組織化する 仙台

地域と学校の連携による取組は、校長先生や担当の先生が異動すると終わってしまう…、各地で聞かれる悩みです。仙台広域圏（気仙沼市）の面瀬小学校では、先生が個別に関わっていた地域と連携した授業を、学校全体の財産にするために、校内で情報を共有するだけでなく、地域のパートナーとともにESDプロジェクト連携推進委員会をつくりました。

33 学びあいの場をつくる 仙台

ESDの内容や体制は地域によって様々です。仙台広域圏では、ESDに取り組む3つの地域が集まって、それぞれの活動や進め方を学びあう場を設けました。また、新たな地域でこれら3地域の経験を伝える学びあいセミナーを開催し、新たにESDに取り組む地域を生み出しています。

34 インターネットを活用する 山口

山口・島根広域圏の協議会の会議はもっぱらインターネットミーティング。「地域が教室」の実施拠点が10拠点に増え、インターン生が東京などに散らばってしまっても、インターネットを有効に活用することで、頻繁に多くのメンバーが議論に参加でき、継続的に学びあえる基盤となっています。





体制を維持するための基盤をつくる 5つのヒント

パートナーシップを支える仕組みをどう維持するか？ 学習やそこから生まれた活動の経費をどう調達するか？ 資金の調達と人材の確保は、全国共通の悩みです。助成金、補助金、寄付、収益活動、人的貢献…、今はあるものを組み合わせながら支えていくしかありません。

35 行政の施策に組み込む 北九州 豊中

北九州市では、ESDをよりよい地域づくりのための施策と位置付け、ESD協議会に市の環境部と教育委員会が参画するだけでなく、協議会事務局に職員を派遣してその運営を支えています。豊中市では市の環境政策室、人権企画課、子育て支援課、そして教育委員会の地域教育振興課、人権教育企画課が協議会に参画、それぞれの啓発事業などをESDと連動させるという視点で取り組んでいます。また、リソースセンターの運営経費を、市が拠出しています。

36 大学の「地域貢献・社会貢献」とつなげる 仙台 江戸前

学校教育法の改訂で、大学の目的に、「社会への貢献」が加筆されました。東京海洋大学や宮城教育大学では、域内の小中学校の授業を支援することが、地域への貢献になるだけでなく、学生達のよい学びの場になっています。

37 協定を結ぶ 雲仙

雲仙では、雲仙市・長崎県・長崎大学の三者の協定を結び、連携して持続可能な地域づくりを目指すことを確認しています。協定があることで、関連する活動を進める際に協力体制が担保されます。また、担当者が異動しても連携体制自体は継続されるなどのメリットがあります。

38 補助金、助成金を活用する 須玉

須玉町では、環境省のESD促進事業の終了後も、国の地域再生計画の認定制度などを活用し、都市農村交流を軸とした持続可能な地域づくりと人材育成に着実に取り組んでいます。さらに、企業との協働事業にも発展しています。

39 収益活動に発展させる 山口

山口では、教育・体験活動の有料提供やフェアトレード事業への展開など、地域の材・財を持ち寄りコミュニティ・ビジネス化し、自主財源を生む活動につなげています。観光、農業、国際協力、自然エネルギー。社会の情勢・ニーズを読み取り、小さくとも経済的に成り立つ事業を組み立てるパワーとノウハウが人を惹きつけています。

未来をつくる学び

14の実践紹介

大都市で、農山村で、
ベッドタウンで、島で、
様々なESDが展開され、
地域に笑顔を広げています。



食と農を地域の中で ほんものまると体験学習

地域の市民、農家、行政、NPO、企業、教員が協働し、生産から販売までを子ども達が学びながら関わる「チルドレンズファーム」や教員研修の実施、都市と農村の交流による学びの場「ライフスタイルファーマー塾」の開講など、「食」や「農」をキーワードとした「学びあい」事業に取り組みました。

チルドレンズファーム



食べ物がつくられるプロセスに関心を持ち、自分と自然と社会のつながりに気付くことを目指して開催された「チルドレンズファーム」では、パンづくりのプロセスをまると体験することに挑戦しました。材料のすべてを「お店」ではなく「自然」から調達することで、「自分達が日ごろ食べているものはすべて自然からいただいている」ことを実感。また、食べ物が自分のところに届くまでに関わる様々な仕事や社会の仕組みが少し理解できたようです。

- ◆対象 小学校高学年
- ◆協力者 農家の方、パン屋さん
- ◆プログラム
 - 5/26 麦の種を播いてみよう+仲間と知り合おう
 - 6/24 自然の中で酵母を探そう
 - 7/29 海水から塩を採りだそう
 - 8/26 スイカから砂糖を、生乳からバターを採りだそう
 - 9/8 実際にパンを焼いてみよう
 - 9/23 フィールドイズでチルドレンズファームマーケット

教員研修



地元当別町にある持続可能な地域づくりへの取組を活かしたESDを、学校の授業で実施してもらうことを目指し、3日間の「教員研修」を開催しました。1日目は地域の人々と出会い、彼らが取り組んでいる活動を学ぶ時間、2日目は体験学習の考え方と手法を学ぶ時間、そして最終日にはそれらを活かして授業案を作成しました。この研修は先生方への評判も上々で、次年度以降の開催を計画しています。

- ◆1日目に出会った方々
 - ・当別川と石狩川の合流点で開発局から自然再生事業を学ぶ
 - ・(株)ロイズコンフェクトで、チョコレートの歴史やつくり方、流通について学ぶ
 - ・ひなたんぼファームで無農薬栽培のお米づくりのひとつ「冬水田んぼ」を学ぶ
 - ・放牧した健康で安全な牧場経営を目指しているファームエイジ(株)から、会社設立の思いや、現在の日本の農業や畜産について学ぶ
 - ・辻野グループ(株)で、自然と共生した暮らし方を目指している田園住宅について学ぶ
 - ・道民の森で、ここで行われている環境学習や、町内の学校の活用の様子について学ぶ

海・山・まちをつなぐ、ESD広域連携

仙台広域圏では、仙台市・気仙沼市・大崎市田尻地域の3地域が、それぞれに特徴ある環境教育やESDにつながる学習活動に取り組んでいます。ESD促進事業では、これらの拠点を結び、広域圏同士の学びあいを進め、各地の活動を活性化しています。また、広域圏全体でESD月間を決め、各地で連動したイベントやセミナーを開催し、広く圏内へのESDの普及を進めました。

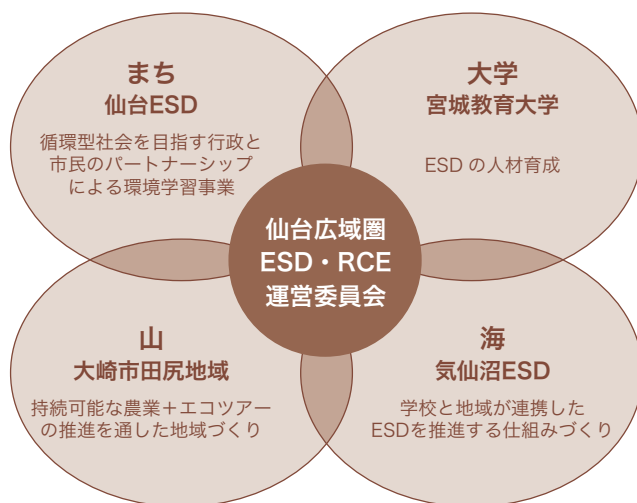


ESD学びあいセミナー



仙台広域圏は国連大学が推進するRCE (Regional Centre of Expertise : ESDの地域拠点) のひとつ。右のような特徴のある3地域と1大学がその構成メンバーです。

これら3地域1大学がそれぞれにESD協議会をつくりそれぞれの地域内での活動を進めるとともに、定期的に広域圏運営会議を開催し、連携によるESDの活性化を目指しています。学びあいセミナーは、それぞれの行事や研修にあわせて開催し、互いに参加しあいながらそれぞれの活動のエッセンスを共有しました。また、白石・七ヶ宿地域や栗原市など、新たな地域でこれら3地域の経験を伝える学びあいセミナーを開催し、新たなESD拠点が生まれつつあります。



学校と地域が連携したESDを推進する仕組みづくり



気仙沼市のESDの特徴は、地域の産業や、自然、暮らしをテーマにした学習が、地域の人々の協力に支えられて、多くの小・中・高等学校で展開されつつあることです。その発端となったのは、気仙沼市立面瀬小学校での取組。2002年、各教員が個別に取り組んでいる地域との連携による活動や環境学習のプログラムを全学年分洗い出し、教科と連携をさせ、学校全体で全学年年間カリキュラム (ESDプログラムチャート) を作成しました。そして、教育委員会や宮城教育大学、社会教育施設や地域のNPO、漁業者など、多くの協力者によるESDプロジェクト連携推進委員会をつくりました。また、教育委員会はこの取組を全市に広げるべく冊子「メビウス」と「ESDカリキュラムガイド」を作成・配布しています。

江戸前の海「学びの環づくり」

東京海洋大学では、「江戸前の海」を囲む地域で持続可能な海のあり方を考え実践する「学びの環づくり」に取り組むため、東京湾周辺の博物館や漁業者、NPOなどの参加を得て江戸前ESD協議会をつくりました。ESD事業では、学校や博物館を拠点に、地域でESDを実践していく「江戸前ESDリーダー」の養成に取り組みしました。

江戸前ESDリーダー育成



大田区立大森海苔のふるさと館（通称のりかん）と大森ふるさとの浜辺公園（通称ふるはま）をフィールドに、大学・社会教育施設・NPOの協働によって、江戸前ESDプログラムを開発しながら、その担い手となるESDリーダーを育成しています。プログラム開発では、「耳袋」（体験の共有）と「カフェ」（知識の共有）を進めながら、「寺子屋」（ワークショップ）で検討していきました。

4月から学生達がふるはまでの環境学習プログラムに参加しながら、教員やPTA、NPO、博物館などの関係者にインタビューを行い、江戸前ESDに対する期待を探りました。そして、フィールド体験や勉強会を実施しては「ふりかえり」を行い、それをワークショップでのプログラムづくりに生かしていきました。その結果、「ふるはま生き物探検隊」と「海苔の町を伝えよう」という、地域資源を再認識する活動プログラムが2本完成しました。これらのプログラムは2008年度の大学授業の中に組み込まれ、のりかん、大森地域の方々に多大なご協力をいただきながら実施しました。

- ◆対象 東京海洋大学の学生、地域で活動される方々
- ◆協力者 太田区郷土博物館、NPO法人C&P（地域パートナーシップ支援センター）、大森東小学校、中富小学校
- ◆プログラム開発プロセス
 - 2/13 ふるはま現地視察
 - 4/13～ C&Pの小学生対象環境学習に海洋大生が参加（以後、継続的に活動）
 - 6/18 海洋大生企画ワークショップ「ふるはまで私達に何ができるか」
 - 7/10 江戸前ESD協議会ワークショップ「協働でなにができるか？」
 - 8/6 ワークショップ「ふるはまプログラムづくり①」
 - 9/5 ワークショップ「ふるはまプログラムづくり②」
 - 9/27 中富小学校で総合学習の支援
 - 10/2 東大森小学校で「おもしろ理科教室」
 - 10/12 ワークショップ「のりかんプログラムづくり」
 - 11/2 ワークショップ「のりかん・海洋大協働プログラムづくり」



グラウンドワーク発・環境まちづくり人材育成

日本におけるグラウンドワーク発祥の地・三島市では、市民・NPO・行政・企業との連携と協働により美しい水辺環境を取り戻し、現在もその維持管理と環境改善に多くの市民ボランティアが活発に取り組んでいます。ESD促進事業では、この経験と人材を生かし、さらに県内外の高校との交流を通じて、若者を中心とした環境まちづくりの担い手育成事業に取り組みました。



みしまESD環境まちづくりゼミ



三島は、環境まちづくりの先進地なのに、そのことを知っている静岡県内の大学生は少ないのが現状です。それは、学生が集うエリアとまちづくりが実施されているエリアが離れていることもその一因と考えられます。そこで、まちづくりの醍醐味を若者に伝え、その担い手を育てたい…、そのような思いから、まちづくりゼミをスタートしました。連続講座の参加者を確保するのは苦労しましたが、県内外の大学や地元の高校に告知の協力を得ることで、まちづくりに関わりたいと考えている若者達が集まりました。

- ◆対象 高校生、大学生など20代前後の若者達
- ◆協力者 郷土史家、農家の方、ふるさとガイドの会、コンサルタント、商工業者など
- ◆プログラム
 - 第1回 講義：協働によるまちづくりとは？
 - 第2回 講義：「水の都・三島」の歴史と文学を学ぶ
 - 第3回 講義：地域ブランド・三島の農産物を学ぶ
 - 第4回 体験：三島の魅力再発見 環境・観光資源を学ぶ
 - 第5回 体験：新たなエコツアーの開拓
 - ー河川清掃ちゃんかけ拾いと
 - 三嶋曆づくりー
 - 第6・7回 三島のまち歩き発見ワークショップ：
 - 若者が集うにぎわいのまちづくりを学ぶ
 - 第8回 発表会：「若者が集うにぎわい創造のまちづくり」シンポジウム

水辺環境の回復から始まった三島のグラウンドワークですが、今では環境まちづくりを軸に、まちの歴史や文化の掘り起こし、森づくり、農業体験、高齢者の生きがづくり、子ども達の環境学習サポート、バイカモ（水中花）を通した韓国との交流事業などに広がっています。そんな地域の魅力を地域の大人達からしっかり学んだ上で、それを若者の感性で新しいまちづくりの企画にまとめていく連続講座。最後の発表会では、「アウトドアツアー＋デリシャスお土産企画」や「大学内に市民と学生による“まちづくり楽習センター”を新設」などが提案されました。

現在参加した若者達は、卒業論文のテーマにしたり、腰切不動尊の大祭に企画参加したり、さらには、海外のNGO活動へ協力するなど、NPOやサークルのリーダーとして活躍しています。



北杜市須玉町 (NPO法人えがおつなげて)

都市と農村の交流が生み出す学びあい

過疎高齢化により、遊休農地の増大、山林の荒廃等が進んでいる須玉町増富地域は、農・森林・グリーンツーリズム・自然エネルギーなどのテーマを掲げ、NPOと地域の多様な組織が連携し、都市と農村が学習交流しながら、地域発展につなげています。ESD促進事業では、そのような活動を生み出す「都市農村交流コーディネーター」の育成に取り組みました。

都市と農村の交流と学びあいが培う農村開発プロジェクト



空き家、廃校、農地や森林などの遊休資源を都市住民の参加によって活用する。子ども達の農山村体験活動を受け入れる。新規就農者を支援する、バイオマス温泉郷などで森林資源を活用する。都市と連携して農林産物の商品開発を行う。須玉町では、そんな持続可能な農村開発プロジェクトを、地域農民と都市からの連携組織の人達が、農村の資源や魅力、課題を学びあいながらつくりあげています。農山村の魅力を楽しみながら、それを産業化していく計画をつくり、できることからどんどん実行していく。そんな活力のある場が、新たな都会の人々をひきつけているのです。

そして2008年、これらの計画づくりに携わってきた個別部会を統合し、地域再生協議会が発足、国の特区認定を受け、新たな財源を確保しながら、夢を形に、計画を現実にする取組が始まっています。

都市農村交流コーディネーター養成講座「えがおの学校」



高齢化、過疎化、遊休農地の増大、山林の荒廃、地域コミュニティの危機…、荒廃の一途をたどる農山村と、自然体験、癒し、田舎暮らし、食の安全等の自然回帰志向が高まる都会。各地で都市と農村の交流による農山村の活性化への期待が高まっている中、須玉町ではその現場と経験を活かし、都市農村交流コーディネーター育成に取り組みました。

農村部の多様な資源を的確に見定め、地域に貢献できる持続性のある都市農村交流（農工商連携）等事業を企画・計画し、多様な主体の調整を行いつつ、事業実施するためのスキルや知識を身につけることを目指し、座学とOJTを組み合わせて実施しました。

◆対象 都市農村交流のコーディネートに関心を持つ人

◆プログラム

- 第1回 都市農村交流概論
- 第2回 都市農村交流概論2
(6つの事業スキル概論)
- 第3回 多様な農村資源と、農村課題
- 第4回 様々な都市のニーズ、動向とその活かし方
- 第5回 都市農村交流の事業マネジメントとコミュニケーションの手法
- 第6回 都市農村交流の事業計画づくり
- 第7回 都市農村交流コーディネーター卒業試験

小学校を核とした地域の絆再生プロジェクト 「かすがいKIZUNA」

新興住宅地である春日井市では、東高森台小学校において、中部大学や地域のNPO・企業・福祉施設などが協力し、身近な自然環境や、地域に暮らす様々な人々との絆を取り戻す「かすがいKIZUNA」プロジェクトに取り組みました。子ども達の学びを大学生がサポートし、その経験から大学生自身も大きく成長する、重層的な学びの場が生まれています。



かすがいKIZUNA推進室



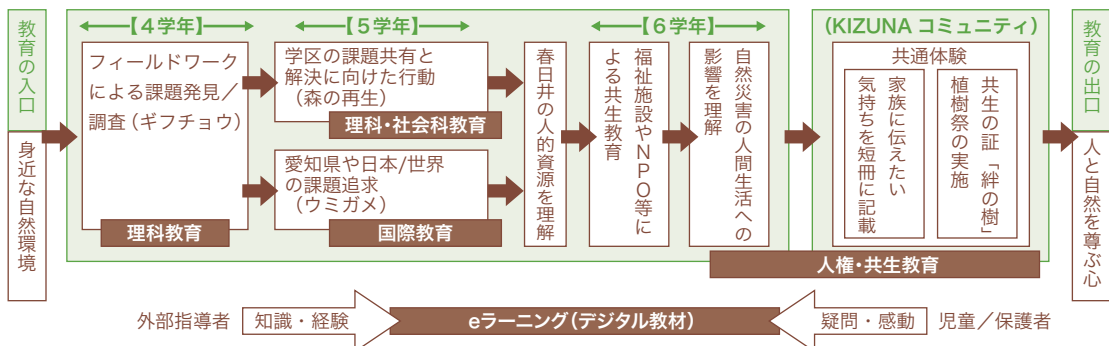
小学校教員、中部大学教員、大学生、eラーニング開発企業、自然観察員、福祉NPOやPTA有志などがメンバーとなって、「かすがいKIZUNA」推進室を設置。毎月2回程度会議を開催して、プロジェクトの企画や運営の調整などを行いました。自然環境や地域の人々との共生について学ぶ「KIZUNAラーニング」、その学びを地域の人々とわかちあう植樹イベント「KIZUNAコミュニティ」、大学生を育成する「KIZUNAコーディネーター」がプロジェクトの柱です。

KIZUNAラーニングでは、4年生は身近な自然の中の共生、5年生は自然界との共生、6年生は多様な人間との共生をテーマとして、それぞれにフィールドワークと教科学習をつなげるカリキュラムデザインを行いました。デザインには、大学教員、社会教育関係者、福祉NPO、学生等が、小学校教員とともに取り組みました。

KIZUNAコーディネーター



学生達がこれらのカリキュラムの担い手となるために実施された大学の授業が「KIZUNAコーディネーター」です。事前に森の健康診断や福祉施設体験などの方法を学び、アシスタント・ティーチャーとしてのスキルと、ESDに関する知識を身に付けます。フィールドワークでは、小学生達への説明資料を事前に作成して、当日は小グループを1人ずつ担当して子ども達の活動をサポートするなど、KIZUNAラーニングの実施において重要な役割を果たしました。また、協議会の議事録作成でも学生達が活躍しています。



つなぐ仕組み 「ESDとよなかリソースセンター」

2005年に環境・多文化・ジェンダー・子育て支援などに取り組む行政・財団・NPOが集まり、ゆるやかなネットワーク活動をスタートした「ESDとよなか」。地域の様々な人達や団体が有機的につながるようなESDプログラムをコーディネートする機能を担うために、地域のリソース（人材・団体・場所・プログラム等）を集約し、つなげる「リソースセンター」の構築に取り組みました。

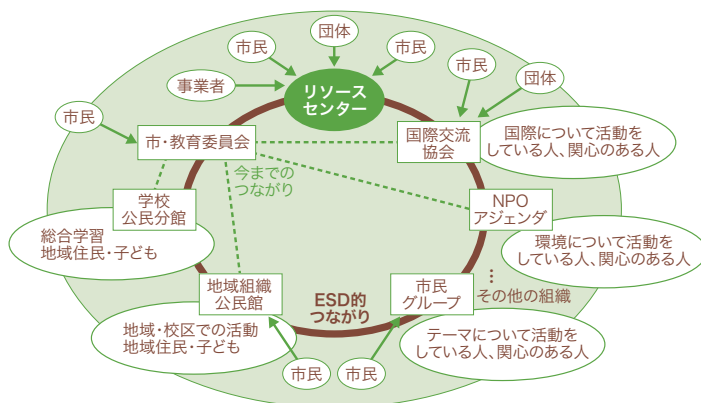
ESDとよなかリソースセンター



学校や公民館、図書館、その他教育施設や市民グループなどが、市民や子ども達を対象に学習プログラムを企画する時に役立つのが、リソースセンター。環境・多文化・人権・福祉などの課題に取り組む地域のリソース（講師や活動団体、プログラムなど）情報を集め、ESDとよなかのメンバー団体の窓口やウェブサイトで紹介・コーディネートしていく、それがリソースセンターの役割です。

人材リストを作成・公開しているところはたくさんあっても、あまり活用されていないのが現状。そんな課題を踏まえ、豊中では実際に子どもや親子を対象にしたESDプログラムを企画しながら、地域の活動団体などと顔の見える関係をつくりつつ情報を集めたので、自信を持って他の人に紹介できるのが特徴です。

第一段階はリソースシートや実施プロジェクトをウェブサイトに公開し、市民に提供し始めました。このリソースセンターの運営経費は、2008年から豊中市が負担しています。



赤ちゃんからのESD



ESDとよなかのキックオフ会議で生まれた「赤ちゃんからのESD」は、子ども達が平和で安全に過ごすことのできる未来をつくるために、身の回りの生活や子育て環境を見直していこうという活動。親子カフェや子育て広場の取材をして、環境イベントで親子カフェを実現したり、おやつづくりやまちあるきを通じて環境や安全のことを考える講座などを開催したりしています。

メンバーは育児中ということもあって毎回参加できるとは限りません。都合が付かなくてしばらくお休みしても次に都合がいい時に参加できるという「ゆるやかなつながり」を、環境問題や育児の問題に対しても急な解決を求めるのではなく「自分自身から沸く気づき」を大切にしています。

環境学習からはじめる持続可能なまちづくり

1980年代後半から環境学習に熱心に取り組み、2003年には環境学習都市宣言を行った西宮市。ESD事業では、これまで培ったネットワークと環境学習事業をベースに、福祉や国際交流分野との連携を図りながら、市民向けの「地域コーディネーター」研修プログラムの実施や、多くの市民に持続可能な地域づくりのコンセプトを伝えるイベントなどに取り組みました。

過去から学び、今を知り、未来を考えるセミナー



環境学習都市宣言を行っている西宮市は、中学校区を基本単位に「エココミュニティ会議」を設置し、主体的な活動を生み出す場として推進していく施策を持っています。ESD推進協議会では、エココミュニティ会議でコーディネーターを担う人材の育成を目標に、全14回の連続セミナーを開催しました。持続可能な社会のありようを考えるには、現代社会の諸課題をつなぐだけでなく、過去から築きあげられてきた市民の思いや取組の歴史を踏まえることが重要です。受講生は、講義やフィールドツアーを通じて西宮の過去と現在を学び、未来を考えるグループワーク、学校やエココミュニティ会議の現場体験を通して、コーディネーターとしての基礎を学びました。

◆全14回のカリキュラム◆

- | | |
|---------------|--------------------------------|
| 過去から学ぶ | 第1回 「文教住宅都市宣言」が目指したことは |
| | 第2回 「平和非核都市宣言」が目指したことは |
| | 第3回 「環境学習都市宣言」が目指したことは |
| | 第4回 「愛と協同」を基本とした協同組合運動の原点とは |
| 今を知る | 第5回 世界の子どもの現状は |
| | 第6回 人権を守る取り組みの現状は |
| | 第7回 現地見学バスツアー① 西宮の歴史・自然・文化関連施設 |
| 未来を考える | 第8回 現地見学バスツアー② 児童育成・地域福祉関連施設 |
| | 第9回 グループワーク①「社会が求める人材とは」 |
| | 第10回 グループワーク②「市民が求める地域とは」 |
| | 第11回 グループワーク③「21世紀が求める教育とは」 |
| | 第12回 現場見学①「学校教育での実践」 |
| | 第13回 現場見学②「エココミュニティ会議での実践」 |
| | 第14回 セミナー「多様な世代で議論する未来の地域・地球」 |

ふるさとウォーク



地域の大人達や子ども達に、地域の諸課題や歴史・文化などについて学び、持続可能な未来社会のあり方を考えてもらうきっかけをつくろうと、楽しく気軽に参加できるウォークラリーを開催しました。宮水コース(3km)と津門の入海コース(3.5km)各10カ所に設けられたチェックポイントでは、ESD推進協議会に参加する各種団体が、環境、教育、人権、平和、防災など、それぞれの活動につながるクイズを用意。ゴールではクイズの答え合わせと抽選会を行い、600名の市民と子どもが「すべての人やいきものにとって幸せな未来」をつくろうと活動している人々と出会い、交流する場となりました。

それまで接点のなかった福祉分野の参加を得ようと、開催日は総合福祉センターが主催する「輪イ和イひろば」の日程に合わせ、同会場内にクイズコーナーを設置させてもらうことで連携を実現。「輪イ和イひろば」の主催者にとっても、多くの市民がウォークラリーで会場を訪れることは嬉しい提案でした。

テーマ横断・実践交流型ESDのネットワークづくり

環境首都を目指す北九州市は、100万人の市民にESDを広めることを目的に、2006年、官民の多様な主体が参画する「北九州ESD協議会」を発足しました。現在行われている様々な活動にESDの視点を取り入れ、活動をつなげていくために、ESDの勉強会、ワークショップ、ファシリテーターの養成を行い、100万市民へのESD普及活動に取り組みました。

北九州ESD協議会



北九州ESD協議会は、学校・大学・NPO・地域団体・企業・行政など40数団体からなる大所帯。「広報」「調査・研究」「プロジェクト」の3チームに分かれ事業を進めています。

事務局は市の財団「アジア女性研究交流センター」が担い、事務局長（市から出向）と事務局員1人分の経費を市が負担しています。メンバーの連絡調整、3つのチームの活動のサポート、全体に共通するプロジェクトの企画運営などが事務局の仕事。忙しいメンバーの参加・協力を得ながらも、協議会独自の事業を進めていくには、協議会そのものを担う事務局が重要になります。

協働を生み出す「プロジェクトチーム」



協議会メンバーは、3つのチームの中から参加したいチームを選び、そのチームの中で役割を担います。また、チームには組織の長ではなく、実際に活動する若い世代に参加してもらうよう働きかけるなど、主体性、機動性を発揮できるよう心がけています。

具体的な協働によるESDを企画・実施する「プロジェクトチーム」では、初回、参加する10数団体がそれぞれの活動と得意なポイント、必要なサポートなどをしっかり発表しあう時間を持ちました。ここからいくつかの出会いが生まれ、共同企画がスタートしました。

ESDファシリテーター研修

自分の所属する団体や他の団体で、既存の活動をESDの視点で考えることを助け、活動や学習の場をデザインできるようになることを目指し、1日研修を行いました。

その後、「ファシリテーション技術をもっと学びたい」という参加者の声もあり、参加者が順番に企画・進行を行う月例の勉強会がスタートしました。また、2008年度は全5回の連続講座に取り組みました。

- session1 アイスブレイク
- session2 既存の活動をESD化するワーク
(個人作業→グループで意見交換)
- session3 プログラム作成
(興味・関心の近い人とグループをつくる)
- session4 プログラム発表&相互評価

持続可能な交通まちづくり市民会議

大阪市西淀川区は大気汚染公害で悩まされた地域。教育機関・NPO・自治組織など様々な組織が一緒になって、「交通まちづくり市民会議」を設置しました。多くの市民に交通まちづくりに参加してもらえるよう、各団体が情報共有を進めながら、フードマイレージゲーム、自転車マップや菜の花プロジェクトなどの取組を地域に広げました。

持続可能な交通まちづくり市民会議

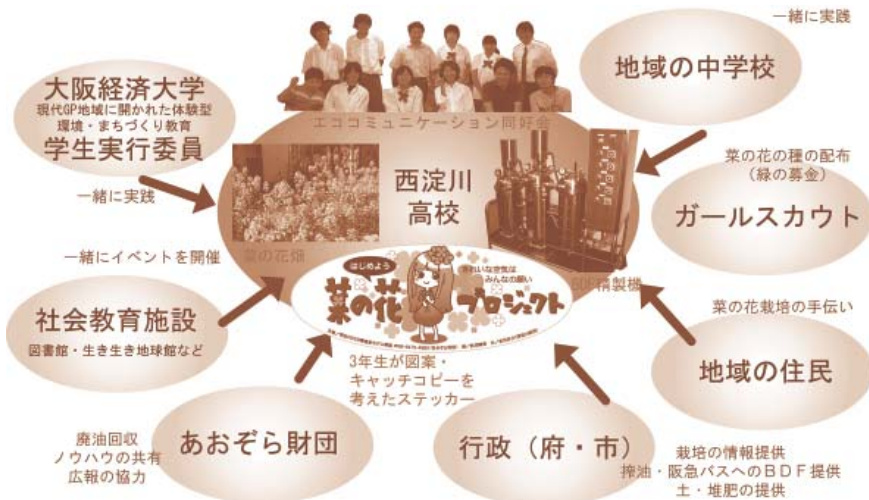


ESD促進事業をきっかけに、持続可能な交通まちづくり市民会議は生まれました。立ち上げ当初、事務局を担ったあおぞら財団は、行政、社会教育施設や自治会組織などに説明を兼ねてヒアリングに何度も通い、相手のニーズや課題を把握しながら、地道につながりをつくっていきました。市民会議が発足してからも、メーリングリストやブログを活用して情報共有を進め、また、会議の欠席者には個別に説明に通うなど、丁寧なコミュニケーションを心がけています。

菜の花プロジェクトでつながる



大阪府立西淀川高校が取り組み始めた菜の花プロジェクトは、学校、大学やガールスカウトなど様々な協議会メンバーに広がり、異年齢集団が一緒に活動を行う場が生まれました。大学生が高校生に、高校生が小学生に教える中で、しっかりしようという自覚が芽生えてきたり、また、中学生の頑張りが高校性を刺激したり、小学生のはつらつとした姿に高校生も頑張ろうと思えたり、互いに教え、教えられる場面で生まれる刺激で、お互いが元気になっていきます。そして、これらすべての活動に必ず専任スタッフ(大学院生)が参加し、各団体の橋渡し役になり、子ども達の信頼を得たことで、その効果を高めることができました。



「地域が教室」広域連携ネットワークづくり

この地域に点在する山・海・畑・歴史というフィールドを活用し、それぞれの地域が抱えている課題解決を題材とする講座「地域が教室」。様々な問題の解決に取り組む人材の育成だけでなく、「半農半〇〇」という起業モデルを生み出しています。また、移動式のスクール「ESDキャラバン」や、常設展示の「ESDミュージアム」を通して、各地に「地域が教室」の取組を広げています。



地域が教室



「地域が教室」では、山林の整備、耕作放棄地の畑やおばあちゃんが手をかけられなくなってしまった農園での農作業など、地域が抱えている問題に対し、その解決のための作業をプログラム化し、都会から参加者を集めて作業体験をしてもらい、そんな講座を開いています。講座への参加を通じて、人の役に立つことの楽しさや、自然と向き合って暮らすことの大切さを実感でき、U・I・Jターンを目指したり、都会に戻って都市農村交流に取り組む若者やシニアを増やしています。

また、「半農・半IT」「半農・半観光」「半農・半大工」「半農・半塾」などの新たな起業モデルを示し、起業を具体的にサポートする講座やツールを有償提供することで、活動自体が収益を上げられるように工夫しています。

◆これまで扱ってきたテーマ◆

- ・竹やぶの整備と竹炭づくり
- ・氷室開き
- ・みかんの収穫
- ・古民家を活用したミュージアムづくり
- ・さわって遊んで考える体験型ミュージアムづくり
- ・シルクロードに感謝とお返しミュージアム
- ・森のミュージアム
- ・石風呂体験
- ・無人島体験など自然体験 など

◆起業支援プログラム&ツール◆

- ・フェアトレードの講習会とショップ開設 (参加費10万円)
- ・竹炭窯セット (20万円)
- ・旅館吉田屋若女将塾観光学科
- ・都市と田舎の問題解決勉強会 など

インターネットによる学びあい



山口・島根広域圏は、現在、山口市・萩市・周防大島町・島根県大田市・東出雲町など6拠点に6団体の協議会メンバーがいて、今も広がりつつあります。地理的に離れたこれらの関係者の情報共有やミーティングは、インターネットを使ったテレビ会議が中心。手軽に会議が行えるため、頻繁に多くのメンバーが議論に参加することができ、継続して学びあえる基盤ができています。また、東京に戻ったインターン大学生や若者が継続して「都市と田舎の問題解決勉強会」に参加したことで、「東京に活動拠点をもって、都市と田舎の架け橋のために行動する」ことにつながりつつあります。

学社連携・地域協働による ESD継続のための仕組みづくり

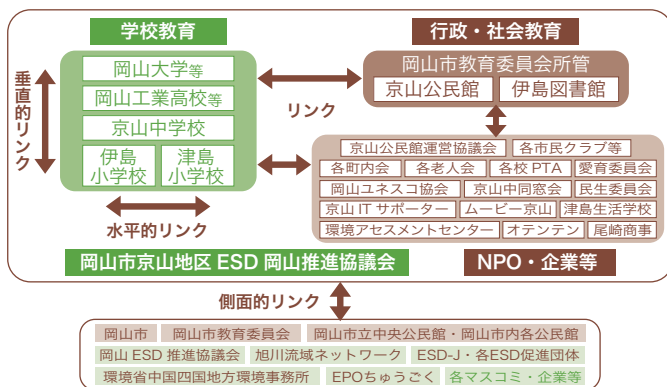
岡山市京山地区は、公民館を拠点として、全世代合同及び学社連携によって2003年から地域全体でESDに取り組んでいるESDの先進地域。環境点検、エコツアー、ESDフェスティバル、ESDサミット(地域全体会議)など、連携・協働によるプロジェクトは多彩で、関わる主体も増えています。ESD促進事業では、このような活動が発展して大所帯となった仕組みをどう維持していくかという大きな課題に挑戦しました。

ESDフェスティバル



京山地区では、学校や公民館、地域の活動グループがそれぞれに行ってきたESDにつながる様々な取組を持ち寄り、さらにESDのつながりを広めていこうと、毎年「ESDフェスティバル」を開催しています。2009年は1月の土日に開催。企画のために4回の全体会合と多数の個別会合を持ち、地域の大人や大学生計100人の運営スタッフが準備や当日運営に関わり、当日は約750人も地域の老若男女が参加する大イベントとなりました。とかく難しそうないメージがつかまとうESDですが、持続不可能な社会の課題をわかりやすく学べる「よくわかるESD漫画パネル」やトレードマークの「はっばぐま」をあしらった手づくりのモニュメントなど、地域の人に親しんでもらうための工夫も満載です。

中でも特に人気だったのは、地域の映画制作チームが作成した映画「地域を育んだ用水」の上映とワークショップ。身近な用水を通して、子ども達の思いが大人達の心を動かし、地域がつながっていく映画を見て、水と緑のまちづくりについて議論しました。



学社連携による「公共」としてのESD推進



学校と地域社会が連携しながら学びあいを広げ、深めていくことは、誰もが望ましいと思っても、なかなか難しいというのが現状です。京山地区では、はじめに「子どもの水辺でんけんプロジェクト」という学社連携による活動を行い、まずメリットを実感してもらいました。その上で地区全体でESDを推進していく合意を取り付け、学校教育と社会教育の公教育機関に加え、地域コミュニティ、NGO・NPO、企業等が結束したESD推進協議会を立ち上げました。協議会では、ESDフェスティバルなどの具体的なESD実践活動を協働して取り組むことで、常にお互いの関わりあいを深め、連帯感を維持しつつ、学社連携の望ましい方向をともに模索し続けています。この京山地区の成功のポイントは、地区の公的社会教育施設である公民館を拠点並びに事務局とすることで、ESDを地区全体で取り組む「公共」に位置付けられたことにありそうです。

大学と地域の協働によるエコビレッジづくり

雲仙市と長崎大学は、持続可能な地域づくりに取り組むにあたり、多様な市民が参画する「雲仙市地球温暖化防止対策・ESD協議会」を設置し、50年後の持続可能な雲仙市のビジョンをともに描くところからスタートしました。コーディネーター役を長崎大学が担い、メンバー全員で学習と対話を重ねながら温暖化防止対策地域行動計画をつくり、参加メンバーが関心と活動を地域に広げていこうとしています。



地球温暖化防止対策行動計画づくり



持続可能な地域づくりを市民の手で進めるために、雲仙市ESD協議会では、

- ① 科学的知見や地域の活動、多様な主体の価値観や考え方の違いを共有する場
- ② 課題解決のための共通の知識基盤と信頼に基づいた関係性をつくりだす場
- ③ 社会的構造の見直しや構築に取り組む場

として協議会の場を設け、最初は「地球温暖化防止対策行動計画づくり」に取り組みました。

ここでは、50年後のCO₂をどこまで減らすかという目標から議論し、半減を仮定した未来像を描き、そのために何をしていくかを話し合う、バックカスティングの方法を採用。参加者がみんなでブレインストーミングをしたり、KJ法を進めていくべき対策を整理したりしながら協働作業を積み重ねて、計画に関する議論と交友を深めていきました。

◆協議会メンバー◆

環境問題の専門家だけではなく、地域の利害関係者を集めたのが特徴

地域企業団体 11名、地域内企業 4名、環境保全関係団体 2名、地球温暖化防止活動推進員等 4名、教育関係者 2名、自治会 1名、学識経験者 2名、公募市民 1名、行政 8部局 8名（教育委員会含む）

◆行動計画づくりのプロセス◆

- 第1回 主旨・進め方の共有
- 第2回 ワークショップ 地球温暖化および防止対策に関する学習、50年後の削減目標
- 第3回 ワークショップ
 - ① 50年後の雲仙市の将来像について
 - ② 将来像に向かうための取組について
- 第4回 ワークショップ
 - ① 取組内容の整理・確認
 - ② 市民への広報方法について

————— 公開討論 —————

市民との意見交換会
「地球温暖化防止対策行動計画案について」
- 第5回 行動計画素案、実施に向けた部会設置について議論

————— パブリックコメント募集 —————
- 第6回 パブリックコメントの反映と行動計画の確定

雲仙市・長崎県・長崎大学の連携・協力に関する協定書



この活動を雲仙市、長崎県環境部、長崎大学環境科学部の連携・協力で進めるにあたり、三者による協定書を締結しました。協定書には目的、連携・協力内容、運営体制、役割分担などが簡潔に示されています。

4 地域からのメッセージ

14地域のコーディネーターのみなさんに、ESDへの思いやこれからの展望をうかがいました。

みなさんの素敵な笑顔とともにご紹介します。

あなたも「未来をつくる学び」を、地域ではじめてみませんか？



仙台

地域と地域が結びあって、地域の思いをみんなで学んでいます。これから地域をつくる子ども達と大学生達と、今まで地域をつくってきた世代との連携と、地域の多様な山、里、まち、海の暮らしを考えます。(小金澤孝昭)



江戸前

専門分野が異なる教員と教育や研究の手法について議論する、学生がよく知っていることを教えてもらう。始める前には予想しなかった、まさにESDの学びでした。(川辺みどり)



須玉

農村地域では、過疎高齢化が止まらず、遊休農地の増大、山林の荒廃等の危機が迫っています。都市の経済と、農村の生命の相互交流をしながら、両者が豊かに暮らせる社会をつくっていききたい。(曾根原久司)

春日井

各自の既存の活動枠を一步超え、他分野と共通理念を持ち得ることを大人が学ぶことができた経験が最大の成果！子どもや大学生に学ばせると言いながら、実はターゲットは大人でした！(上野薫)



当別

関わった大人が変わり、おもしろがって関わる大人を見ていた子どもが大人の見方を変え、変わることができる場。この場づくりが持続可能な社会をつくっていく学びのキーポイントだと感じました。(山本幹彦)



三島

市民・NPO・行政・企業とのパートナーシップによるESD活動を通して、まちづくりや環境再生活動に参加する大学生や若者たちに実践の場を提供することにより、活気ある地域社会を創っていききたい。(渡辺豊博)



豊中

「Eいいこと！Sスマイル！Dどんどん！～つながろう未来へ～」みんなで、地球や地域、人に「いいこと」を「笑顔」で「どんどん」進めることが、「持続可能な社会」の実現につながります。(上村有里)

ESDを推進する 政府の取組

「国連ESDの10年」は日本の働きかけで実現した国連のキャンペーンです。日本政府もESDの推進に積極的に取り組んでいます。

政府のESD推進体制

国連ESDの10年がスタートした2005年、政府は11省庁が参加する「国連ESDの10年」関係省庁連絡会議を内閣に設置しました。そして、同連絡会議では、2006年3月にわが国における「国連ESDの10年」に関する実施計画を定めました。この実施計画に基づき、2007年度より、学識経験者、教育関係者、NPO、企業等の関係者との意見交換の場として円卓会議を開催し、ESDの推進方策について情報・意見交換を行っています。

●内閣官房
<http://www.cas.go.jp/jp/seisaku/kokuren/index.html>

学校でのESD推進

2008年に策定した教育振興基本法で位置付け、今後5年間に推した学習指導要領では、理科づくりに向けた視点を明記しさらに、総合的な学習の時間の題「地域の教材や学習環境の視点を大切に教育実践の子ども達の学校外活動の指導者

●文部科学省新しい学習指導
http://www.mext.go.jp/a_



西宮

人類が誕生して以降、今日まで続けてきた普通の行為は、過去と現実に「学び」、今を生き、未来に自らの種を残すことではなかったか。この不易である「学び」を育むことがESDではないでしょうか。(添田晴雄)



柏島

来年度以降、近隣宿毛市の沖の島や竊来島といった離島とも連携し、「持続可能な里海づくり」という考え方を宿毛湾広域から四国、全国、世界各国へと広げていきたいと思っています。(神田優)



北九州

北九州ESD協議会は、100万市民がESDを実践することを目標にしています。実現までまだ時間がかかりそうですが、これからもメンバーの意見を取り入れながら、一緒になってがんばっていこうと思います。(永岡博文)



西淀川

ESDは人を元気にすることができます。一人ではやりたくてもできないかとも思っていたことが、ESDで出会った人達の協力で実現できるからです。(林美帆)



岡山

ESDに取り組んだことで、地域社会と自分がつながりました。「一人の百歩より百人の一步」をモットーに、地域みんなで取り組み、みんなで社会を変えていきませんか。(池田満之)



山口

地域財を活かした活動そのものが、教育のフィールドとなり得ることを実体験から感じています。「地域の問題解決に役立つ人材へ、学びの場を創造しましょう!」(小池良太)



雲仙

日本の西端長崎県には豊かな自然、歴史、文化など学ぶべきものがたくさんあります。短い人生の中で精一杯生きて学んで次世代に伝えていかなければなりません。みなさんも体験に来てください。(早瀬隆司)



地域でのESD推進

ESDと名前がついていなくとも、地域でのESD推進のために活用できそうな国の施策はたくさんあります。例えば、地域づくりに関する施策、環境コミュニティ・ビジネスに関する施策、食育や都市農村交流施策や環境学習関連施策など。各省のESDにつながる施策を紹介したウェブサイトや、環境省「ESDの10年促進事業」のリンク集のページにまとめています。このサイトでは、14地域の活動報告や助成金情報紹介サイトも掲載しています。

●環境省ESD促進事業

<http://www.env.go.jp/policy/edu/esd/index.html>

本計画では、持続可能な発展を国の教育の重要な理念のひとつとし進すべき施策としてESDの推進を明記しました。また、同年に改定や社会などの各科目において取り組むべき内容に、持続可能な社会でいます。

学習指導要領とその解説には、「持続可能な社会の実現につながる課活用」「地域の社会教育施設や各種団体との連携」など、ESDと同様ためのアドバイスがたくさん掲載されています。学校の先生も、子ども、学校と一緒にESDに取り組みたい地域の人も、ぜひ一読ください。

要領

menu/shotou/new-cs/index.htm



発行日：2009年3月

発行：環境省 総合環境政策局 環境教育推進室

<http://www.env.go.jp/policy/edu/esd/index.html>

全国事務局：NPO法人「持続可能な開発のための教育の10年」推進会議（ESD-J）

<http://www.esd-j.org/>

この冊子は、適切に管理された森から生まれたFSC認証紙と、地産地消・輸送
マイルージに配慮し、米ぬか油を使用したライスインキで印刷しています。

